

せん。それはあなたが必ずおかげを下さる！と信じて居つたればこそであります。死ぬものなら何故死ぬと仰つしやつて下さいません。勿論それは私の足りないためではありませんが、私は子供を前にも死なし今又この有様であります。死ぬものなら醫者にもみせ、親として出来るだけの手當をしてやるのであります。親としての責務を十分に果させないでお引取りになるとは、どう考へても聞えません。モウ一遍元通りにして下さい。そして醫者にかけた上で引取つて下さい。それでなくては私自身が満足出来ないばかりか、世間へ對しても申譯がありません。このまゝでは世間の人は何と云ふか判りません。世間の人には判らないのですから、判らぬ人には判るやうにして頂きたい。信心して居るので醫者にもかけずに子供を死なしたと、あなたも私も判らん屋にされてはたまらないことあります。」

さんざん心のありたけを口に出して訴へて居りますと、お扉にパリツ！と音がして神様がお現れになりました。御扉の蔭に隠れて顔は見えませんが、房々とした白い髻だけは見えて居ります。私は相當に激昂致して居りますから、低頭平身

致しません。

「仰せ言があるなら何なりと承ります。私にも申し上げる事があります。まさに膝詰談判といふ意氣込みです。すると神様が私に向つて仰せられますには、

「斯うなるのも先祖の罪によつてさうなるのぢやから暫く辛抱せよ。斯うしてやらぬことには其方の身が浮ばんのぢやから。」

といふお言葉であります。ところで私の方では、モウ先祖の罪も凡そ消えたと思つて居ますから、沈黙を守つて居る譯には参りません。

「私はモウ何もないと思つて居ますが。」

と口答へを致しました。神様は「まだく澤山あるのぢや。」と仰せられます。

「あゝさうで御座いますか。それなら子供もまだ残つて居ることですから、それも然るべくお引取り下さい。」

一寸判つたと思ふと、次ぐ二の句が之れであります。それが本當に神様を信じ

て居ない證據なのですが、そんなところに気が付いて居りませんから、一寸氣に入らぬ事があると不足のあるだけ思ふまゝに口走つてしまひます。するとその時、神様から

「其方(ち)は一寸氣に入る事があれば非常に喜び、一つ氣に入らぬ事があれば非常に不足を云ふ。それは神を信じないからぢや。」

と仰せられましたので、私は丁度玄能(げんのう)で頭の腦天(のうてん)を打たれたやうに吃驚(きつこう)致し、

「恐れ入りました。」

と思はず云ひ放つた瞬間、眼が覺めましたので、今のは夢であつたかと周圍を見廻しましたが、夢としましても餘りハツキリして居りますので、夢は五臓の疲れなどと輕々しく取扱へない思ひに驅られ、早々に床を離れ顔を洗ひ御神前にお燈明(とうめい)をあげて神様に御拜禮申し上げようとしますと、お扉が開いて居るではありませんか。夢の中でパリツと音がしたのは、本當に神様がお出ましになつたのか！と恐ろしくなつて来て、家内を揺り起し、

「今斯んな變な夢を見たので御拜禮申し上げようと思つたら、お扉が開いて居る。」

之れは夢ではない。二人の子供のうちどつちか死ぬのだ。それは決つて居る。何にしても神様の御都合に任してお詫びするだけでは、一心にお詫びしなければならぬ。まだく罪のある身、一心のお詫より外に道はない。」

と云ひ聞かしたことでありました。その内に家内が妊娠致しました。出來た子供は女でした。五日目に神様から、

「醫者にかけて置け。」

といふお知らせを頂きましたので、醫者にかけて置きましたが、醫者にかけて五日目にその子供が死亡致しました。その事を神様に申し上げますと

「大厄小厄又大厄小厄。」

との仰せです。

「有難う御座います。」

此時は本當に有難く、心の底からお禮の言葉が迸つて出ました。夢で教へて頂いて懸命にお詫びをして居りましたら、出來て居る子供が亡くなるところを、今度生れて來る子供に振り換へて頂いたのであります。

私は信心さして頂くまでは、自分自身にそんなに悪い事をした覚えはないと、相當強い自信を持つて居りました。それは私自身としましては、さう斷言しても憚らぬくらい眞直な道を通つて來たつもりであつたからであります。信心さして頂くやうになりましたから、御無禮とか心得違とか云ふ事が判り、之れまでの行き方が信心といふ眼鏡を通して見ると、そこに御無禮があり心得違があることを知らして貰ひましたが、その他に於ては、私は罪なことをした覚えを持つて居りません。そこへ神様から「先祖の罪のお取拂」と聞かされ通したので、私としては最初の間はどうも腑に落ちかね、さきに申し上げたやうな夢中間答ともなつたのであらうと存じますが、何にしましても親先祖このかた、天地の間に神様のおかげを蒙つて生かされながらその御恩徳も知らず、神様の思召とはまるで反對の方角へと俺が！俺が！で離れ去り、明るい喜びの天地を暗い悲しみの天地に住みよい有難い天地に住みにくい怨み憎みの天地として來たのではありませんか。親先祖以來の罪障はどれだけあることでありませう？ 神様からお言葉を聞かして頂くか頂かないかの相違があるだけのことでありまして、この事實はどう拒否し

やうもありません。したがつてお互の信心に於きましても、初代の信心の骨の折れることを覺悟しなければなりません。實際初代の信心は六ヶ敷いところを渡つて行かねばならぬことになつて居ります。「本を執つて道を開く者はあらぬ行もするけれども後々の者はさう云ふ行をせぬでも容易うおかげを受けさせる」とは教祖様御立教の御覺悟であります。初代の信心も亦この決意が肝要であります。それでその期間は、先づ十年であります。然し之れも徒らに年限さへ經てばそれでよいと云ふのではありません。十年の信心が一番迷ひ易く、最も骨の折れる時でありまして、神様の方も亦一番お骨折り下されてある時であります。お互の信心は單なる目先だけの問題ではありません。子孫長久家繁昌の永遠のおかげを頂く道であります。宗派によると随分ボロイ事を教へて居るムキもあるやうですが、さう樂をして居て、どうして罪障消滅の丸々棒を引いて頂かせよう。信心の程度に應じて大を小にして頂くのです。「信心は日々の改りが第一ぢや」とあります。お互は改りによつてそれだけづつ罪が消されて行きます。千貫目のものを十貫目にして貰ふのも大を小にです。千貫目のものを百貫目にして貰ふ

のも大を小にです。そこは各自の信心次第改り次第で、大を小に縮少して頂くことになつて居ります。その間こそ神様が最も御苦勞下さつて居るのです。それがお互には判らないものだから、色々不足を並べたてるのですが、さうと知らして頂いたら、まことに勿體ないことでありまして、何から何まで一つとしておかげでないものはないのであります。

ところで、この後私にとつて或る重大な問題が起りましたので、その事を神様に申し上げますと、又「メグリのお取拂」といふ仰せであります。私はさきにも申したやうに、それまでに何遍「メグリのお取拂」を聞かされたことか、屈指に堪へないほど「メグリ」に悩まされて來て居りますので、さう承はると、そのまゝ引退れず、腹の中に持つて居る事をホカ／＼と云うてしまはずには居られません。私はヒタムキに、神様に

「モウ信じられません。それは聞き飽きました。いつも／＼同じ事ばかり仰せられずに神にはおかげを授けるだけの力がないと仰つしやつて下さい。その方が信心がしやすう御座います。さうでなかつたらこの問題を何とかして頂き

たう存じます。たつた一言で結構です。神におかげを授ける力がないと一言仰つしやつて頂きたい！」

と申し上げました。随分極端な暴言ではありませんか。まつたく言語同斷の潜上沙汰です。若し人間同士の間で、差向ひになつて相手に「モウ君の云ふ事は信用ならぬ！」など云ひましたらどうでせう。満面朱を注いでカン／＼になつて怒ることでありませう。まことに恐れ多い次第ですが、私としてはこゝまで申し上げないでは、どうしても腹の虫が承知しなかつたのであります。私は何處までも従ひて行き、ムザ／＼と後へは引かぬ覺悟で張り切つて居ります。斯んな愚かさを告白するのも、御参考になればと存するからであります。すると神様には

「神に二言はない。」
と仰せられました。

「私にはモウ信じられません。信じられてこそ有難くありますが、モウ信じられません。そのお言葉は今日までに何十遍聞いたか知れませんが、私は聞き飽きました。私を信じさしてやらうといふ思召なら、どうぞ私の思ふやうにおはからひ

下さい。それが出来ないと言ふのでしたら、神におかげをやる力がないと仰つしやつて下さい。」

問題が大きかつただけに、私としても軽くはすまされません。否やの御返事を承るまでは、挺子でも動くものかと頑張りましたが、神様は「神には二言ない」で押し通されます。時間にしますと、彼是半時間も押問答を繰返したでありませう。斯んな調子で私は神様相手に張合はして頂きましたが、この儘ではどうしても落合がつきません。どちらか折れて出なかつたら、果しがありません。ところが行き張り上、私も口では強さうな事を申し上げては居りますが、神様に勝てさうな道理がありません。そこで私は先祖の罪のお取拂といふけれど、たゞ先祖の罪のお取拂だけではまるで雲をつかむやうに空漠として頼りない話ですから、もつと具體的なものをつかまねばならぬと思ひまして、

「では私の先祖がどういふ罪を犯しましたか。それを云うて下さい。」
と申し上げました。そのお答が

「ちやあ仕方がない、云うて聞かしてやらう。お前さんの四代前に××の罪を犯

して居る。そのため子孫二十代の苦難がつゞく。ちやによつてそれでは立つまいから神が斯くははからつてやるのちや。何某は三島で三代前に同じ事をして居たのちや。そのために四十台になるまで金は持てぬ。」

と、斯うであります。この中の「何某」とは私の友人の事でありまして、私が承らうともしない餘分の事まで仰せられたのであります。「お前さんの四代前」と云はれますので、指を折りますと、私、私の父、祖父、曾祖父となりますので、私としては曾祖父のお詫びをさして頂けばそれでよいのであらうかと存じ、

「私の曾祖父で御座いますか。」

とお訊ねすると、

「違ふ。」

との事です。

「ではモウ一つ前の先祖高祖父のことで御座いますか。」

「違ふ。お前さんの四代前ちや。」

「それでは矢張曾祖父に當りますか。」

「それは違ふ。つまりお前さんちや。」

とのお諭です。さて斯うなると判らぬことになつて参ります。「つまりお前さんちや」と云はれますと、之れは肉の四代前でなく靈の四代前といふ事になります。それが何百年前の事か判らなくなつてしまひます。そこで私は、

「モウ御免を蒙ります。何百年も前の事は、何と申されましても、私には判りつこありません。私の知らぬ事なら何を云はうとあなたの云ひなり放題です。モウ之れ以上聞きたう御座いません。」

と、この問答無益と打ち切ることゝ致しました。然し私としますと、そのお言葉の中に、何も私がお訊ねもしないのに私の友人の何某の事まで仰せられたのですから、之れはこの友人の事を知つて知る人に就いて、その實否をたゞすことが出来たら、それを傍證として自分の事もおぼろげながらも證據づけられると存じ、その何某に關して氏素性を知つて居る友人を訪ね、

「神様から斯うくしかく」と承つたが、何某に就て「三代前三島で之れく」の事をして居たのでそのため四十台にならねば金は持てぬ」と餘分の事まで仰

つしやつたが、君はどう思ふ？」

と話を致しました。その友人と云ふのは、非常な理窟屋でメグリなど云ふ事は何處までも反對する男でしたが、私の話を聞き了ると、平生に似合はず、

「フウン、さうか。それでは君、餘程お詫びせんといかんぞ。」

と云ふではありませんか。私はその意外な態度に、

「君、今日にかぎつて妙なことを云ふなあ。何でお詫びしないといかぬのだ？」

と、不審の頭を横に傾けないでは居られません。

「それがピッタリ思ひ當ることがあるのだ。」

「何が？」

「某は以前は三島に住んで居たんで、始めから大阪の人ではないのだ。」

「フーム。さうか。では三島といふと？」

「何でも九州だと云つたやうに記憶して居るが、三島といふところがあるらしく、親は三島に居たと云うて居た。」

といふやうな次第で、私は私自身の懷疑にその場で賛成同意の烙印を押してく

れると思ふたのが大當て違ひで、神様の仰せを、矢張間違ひではないのかと承服しないでは居られないことになりましたが、之れが次のこのつゞきとも云ふべき後日譚で、いよく確認せずにはすまされないこととなりました。

北の新地に相原といふ家がありますが、心易いところからよく往來して居りました。或る日のこと訪ねて行きますと、手毬に目鼻をつけたとでも云ひませうか、可愛らしい一疋の犬が居りました。私は思はず、

「可愛い犬ですなあ。」

と申しました。

「何でしたらあげませうか。」

「貰つてもよかつたら貰ひませう。」

「實はババタレで困つて居るので。」

斯んな會話のやりとりで、私はその犬を貰ひ受けて歸りました。大きい犬と違ひ小さい犬のことですから、有り合せの蜜柑箱に藁を敷いて飼つて居りました。友人がやつて来て、

「いゝ犬だなあ。何ぼで買つた？」
と聞きます。

「買ったのではない。貰つて來たのだ。」

「貰つた？ 斯んないゝ犬を。買うて來たのを奥さんの手前、ウソを云うてるのと違ふか。」

「ホントウだ。欲しかつたらあげる。」

そこへ家内が出て來まして、

「妾、犬嫌ひです。」

と云ひます。

「それなら幸だ。僕にくれぬか。貰つて歸らう。」

「では持つて歸つてくれ。」

斯んなことから、その犬は友人の家で養はれるやうになりました。それから一週間ばかり経つて友人が來ますと、私をつかまへて、

「君、妙な事を尋ねるが、あの犬は君の家に居た間、何ぼほど御飯を食べて居た？」

といふ質問です。

「さうだなあ。茶呑茶碗に三杯が餘つて居たやうだ。」

「ウム。それは本當か？」

「何を嘘など云ふものか。それ以外の事を云うたら、それこそ嘘になる。何か僕が君に嘘でもついてるやうに思はれる節でもあるのか。」

「ウン。どうも腑に落ちかねる事があるのだ。」

「何が？」

「何がつて、あの犬身體の小さい割に、馬鹿に御飯を食べるので尋ねて見るのだ。」

「ヘエン。澤山て何ぼほど？」

「君、あんな小さい圖體で、日に六合から食べるのだ。」

「六合?! 生れてからまだ六十日ほどしかたゝぬ犬が……」

「君も知つての通り、僕の家は三人家内だ。それで一升焚くと餘るのだ。それで今日一升焚けば翌日は八合と云つた風に、一升と八合、一升と八合と焚いて居たらよかつたのが、あの犬を貰つてから、毎日一升五合づつ焚いて居るのに、まだ食

べたらん様子をして居るのだから、まつたく妙な犬ではないか。」

「何でそんなに食べさすのだ。そんなに食べささなくてもいゝのに。」

「家内が食べるだけは食べささぬと氣がすまぬ云うて食べさして居るが、朝から晩までのべつ幕なしのかたちで食べて居る。」

私はこの話を聞き、思ひ出したのは犬猫も家族のうちといふ金光様のお言葉でありました。

「君、犬の事をお願いしたか。」

「いゝや。何と云つてお願いするのだ？」

「金光様は、犬猫も家族のうち」と仰せられて居るのだから、犬を飼はして貰ふとなれば、それだけ家族が殖える事になる。だからお願いしたかと云ふのだ。」

「いや、そんなお願いはしない。」

「それはいかん。犬が好きですから飼はして頂きます。どうぞこのものの食代も共におかげ下さいますやう」と斯うお願いしておくのだ。さすればよんば犬が一升飯食べても構はんではないか。」

「なるほど。」

と云うて歸りましたが、又翌日その友人が出て來まして、

「君、あの犬、不思議な犬だなあ。」

と、あきれたやうに申します。

「どうして？」

「飯を澤山食べなくなつた。」

「餘計食べないやうに願つたのか。」

「いゝや、君からあの話を聞いてその通りにお願ひしたのだ。するとそれから

茶呑茶碗に三杯餘りしか食べないやうになつた。」

「さうか。それはおかげを蒙つた。犬で信心を教へて頂いたのだ。」

と、後は笑ひで紛らしましたが、私は之れによつてメグリのどんなものであるか
を知らせて頂いたばかりか、それ以來下女や店員を置いてもこのデ、ンで行けば何
人置かせて貰うても食代萬端滞りなくおかげが蒙れる道が指し示されることにな
りました。

先にお話しましたので、簡単に荒筋を申し上げるに止めますが、私が家族の者だ
けでも生計が手一杯であるにもかゝはらず、神様にお願ひ申して三人までも居候
を置きまして、それが何の屈托もなくおかげが蒙られましたのも、この犬の飼養で
把握させて頂きました筆法を實地に適用させて頂いたものであります。それで
この筆法は、食ふ着る住ふ、生活一切に通じて解決出来るのでありますから、單なる
犬の話だと聞き流さないやうにして頂きたいものであります。さきに「神様が御
主人人間は奉公人の條で申し上げた二人家内で暮しかねた背負ひの雜貨屋さん
が、更に六人を迎へておかげを蒙つたお話も、この筆法の公式から割り出されたも
のであります。それでその時にもたしか申して置いたと存じますが、肝心なところ
は、その時のお互の心の用ひ方でありまして、助かるか助からないか、おかげ蒙る
かおかげ蒙らぬかの楨杆は、一にお互がお互自身の頼りないこと力のないことを
ハツキリ知るか知らぬかの分銅にかゝつて居る事であります。この間もある方
が、

「先生、私は之れだけ一所懸命に信心して居りますのに、モウ一つおかげになりま

せんで困つて居ります。」

と申しましたので、

「なるほど、あんたは一所懸命に信心しては居られるが、それはあんた自身があんな自身を信じて居られるのであつて、神様を信心して居られぬのとは違ひませんか。それでは何ぼ信心しても信心にはなりません。信心といふやうなものを掛尺秤で測るやうに數量的に測定する事は出来ませんが、判り易いためにその割合を云うて見ますと、あんたは事實神様を何割信じて居ます？ 私の眼から見てタカダカ五分で、あとの九割五分は俺が！と云ふものを信じて居られるやうに思はれます。まあ家へ歸つて私の云ふことが間違ないかどうか調べて御覽なさい。」

と云うて置きました。が、之れはこの方ばかりに限らず、どうも皆チヨボ／＼らしくあります。「俺は何割ほど神様を信じて居るか」お互はこの點の檢討吟味が大切であります。その場合假に三割神様を信じて居るとすれば、後の七割は何でせうか。それが俺が！俺が！でなかつたら仕合せであります。然も神様の信じ方が、そんな鹽梅式ですから、頭を打ちつゞけに打つて手も足も出なくなるまでは、何う

してもマル／＼神様が信じられませんか。この意味に於て、打つだけ頭は打つ方が信じよいかも知れませんが、「俺には金がある」「俺には腕がある」「俺には智慧がある」「俺には學問がある」と斯う云ふ思ひを持つて居る人は、餘程その鼻柱が打ち折られて、痛い目辛い目にあはされないと、中々容易に自分自身がどんなものかと云ふ事がハツキリしないものであります。然し斯んな信心は、同じ信心でも不細工な信心ではありませんか。後進は先進が體驗してくれたいところを我が實踐の沃土に移し植ゑて、おかげの花を咲かせ、おかげの實を結ばすのが何よりでありまして、それには理窟なしに信じる事であります。

話が間道へ入りましたが、再び本道に立ち返り、例の犬のお話をつゞけなければなりません。あれから四月経つた或る日の事です。どうして車に轢かれたのか右の前足を怪我しました。

「君の方から貰つた犬が車で轢かれたから、君も一つお願いしてくれ」

と、友人から頼まれましたので、

「それではお願いしよう。」

と、神様に犬のお願いを致しますと、神様から

「それはメグリぢや。」

と仰せられます。私は「犬にでもメグリがあるのか知らん？ 神様は何でもメグリぢやと仰せられて片つけられてしまふのと違ふか知らん？」と、その時心ひそかに呟いたものであります。それから一週間目に友人の妻君がやつて來まして、

「湯川さん。今朝神様に犬の事をお願ひして居ましたら、妙な事が耳に聞えました。お前さんは犬の事を性急に願ふけれど、さうはいかんのぢや。あの犬の親の親は非常に人をかぶつた犬であるから、その罪を持つて生れて來て居る。時を待つておかげを頂かしてやる」とハツキリ耳に聞えました。」

と云ふ話です。友人の家内と云ふのは、随分古い信者で、初代白神先生の時代から信心して居て相當判つて居る人であります。

「餘りハツキリ聞えたものですから、後を振り向きますと、傍に主人が坐つて居りますので、今の聲聞えましたか」と訊ねますと、「何か。何にも。誰か物でも云

ふたか」あれほど大きな聲でハツキリ聞えたのに」と、犬の事を云ひますと、主人は「ウーン。そんな事もあるのかな」と云つておしまひでしたが、之れは矢張神様が知らして下さつたのでせう」

と云うて居りました。それで犬はお願ひしてから一週間目に轢かれた足がうちら側へ曲つてしまふと、更に一週間経つと、左足も曲つてしまひました。右足は車に轢かれたのですから、曲るのもその譯が判りますが、左足まで曲つてしまふとは、その原因が判りません。まつたくおかしな犬であります。前足が左右兩方共曲つて自由がきかなくなつてしまつたのですから、見るからに可愛さうであります。何でも一日も早く直してやりたいものと願うて居りました。

斯んな事ぐらゐんなにでもなるやうに思はれるのに、三月経つても直りません。主人が出て來て、

「君、あの犬返す」

と云ひます。

「足が直つたか？」

「まだ直らぬ」

「家からあげた犬だ。返すといふなら、何時なりと持つて来てくれ。然しあげた時には足が四本チヤンと尋常に揃うて居た筈だ。足が揃うて居るなら受取るが、足が曲つて居るなら一言だけモノを云うて貰ひたい」

「何だ。えらいむつかしいのだなあ」

「何、一寸一言云うて貰へばいゝのだ。私は二十何年信心して居るが、あの犬ヨウおかげ頂かんから、君とここでおかげ蒙つて欲しい」と

「その事か。そんな事が云はれるものか。かりそめにも二十年も信心して居るのだ。モウ犬は返さぬ。ウチでおかげ蒙る」

「さうとも、それが當然だ。それに何で返すと云ふのだ？」

「いゝやそれが表を通る人が犬を見て可愛さうにゝゝと云ふので、それが聞きづらく、あの歩く様ときたらみつともなくて嫌になつたのだ。それで一そのこと返さうと思つたのだ」

「そんな事でどうする。モウ暫く願うてやれ。私も願うから」

斯う云うて別れてから一月ほど経つと、又犬の事を云うて来ました。

「どうもあの犬は餘程メグリが深い。又車に轢かれた」

「何處を？」

「今度は尾を轢かれた。それも毒性に轢かれたと見えて、傷口を見てやると、グルリと皮が剝けて骨が見えて居る。何せ前足が不自由なために、逃げようにも逃げられなかつたらしい。本當にマンの悪い犬だ」

「まあ願うてやりなさい。私も願う」

斯んな次第でありましたが、一週間経つと、一番最初車に轢かれた右の前足が真直ぐに伸びて自由に動くやうになりますと、二週間目には左の前足が直り、三週間目には尾が車に轢かれた跡方もなく綺麗に直つてしまひました。そして再び元氣よく走り廻るやうになりました。ところで傷が綺麗に直つたら文句も理窟もない筈なのに、その犬を連れて主人が私に理窟を云ひに来ました。

「君はメグリと云ふと、そんなものがあるか、何時も反對の鼓を打ち鳴らして居るが、君から貰ひ受けた犬はどうだつた。その親の親が大變人をかぶつたそのメ

グリで、五ヶ月苦しんだではないか。それは君も知つての通りだ。それで斯んな動物にでも、メグリと云ふ事はあるのだして見ると、人間はどんな事をして來て居るか判つたものではない。それが判らぬから、何かの不幸な出來事に直面して、云うても仕方がない不足や愚痴があるのではないか。凡て事が起るのには起るだけの動かない原因があり理窟があるのだ。それを神様がこの「犬」を通して「みな斯んな具合にめぐるものなり」といふことを教へて下さつたのではあるまいか。」云はれて見ると、なるほどその通りであります。

「さうだ。たしかに教へて下さつたのだ。」

「然も君とこから貰つた犬で——」

神様の思召は有難いではありませんか、何處まで深いか判りません。メグリに就いてモウ一息といふところがハッキリ判らなかつたところを、犬を以て教へて下さつたので、私も兜をぬいでどうでも信じないでは居られないこととなりました。之れは共に私がまだ教會を持たして頂かぬ前の話であります。

斯くお話して私の一身上に就いて振返つて見ますと、私は七歳の時に父に死別

し、すでに十三歳の時から金のために苦しんで居ります。之れはさきにもお話致しましたが、十七歳の時には、金のために思ひ詰めて苦しんだ揚句、自殺の覺悟までしたくらいであります。二十一歳の時から信心さして頂きましたが、奉公しても矢張主人に金がなくて共に苦しみました。それで十三の年から三十六までの間で、金に苦しまなかつた日を勘定しますと、あちらで二月こちらで三月といふやうなのを寄せ集めて來て、二年ほどしかありません。十九ヶ年の間に十七年間まで金に苦しみました。その上子供は五人亡くして居ります。五人も子供を死なして、神様からは「まだ足らぬ」と仰せられました。それで恐る／＼「まだ二人残つて居りますが、二人もお取り上げになるのですか？」とお伺ひ申し上げましたら、二人は置いといてやる。それを取つたら血統が絶えるから」との仰せであります。「それは有難う存じます。置いてさへ頂けば結構で御座います」然し足らぬと云ふ事だけは承知して置けよ」お蔭で二人は残して頂いて居りますが、私が教會を持たして頂いてから、何人の修行者を失つたことでありませうか。その數に於て十七人亡くして居ります。「之れなら片腕になる」と思つて樂みにして居りますと、御

苦勞とも何とも仰せられずにお取立てになるのですから、身を斬られるやうにつらい思ひが致します。折角一人前に仕立て親達にも喜んで貰へると力が入つたところで取りあげられるのですから、私にとつては我が子を死なすよりも切ないものがあります。神様としましては死ぬやうなものを一通り修行させて徳を積ましそれで引取つて下さるのですから、大したおかげに相違ありませんが、先方はさうは思つてくれませんか、私の方には心苦しいものがあります。私としましては死ぬやうな人の世話をさして貰ひ、それでメグリの帳面を段々と消して下されてあるのだとは存じますが、それにつけても私は其方の子孫二十代苦難がつゞくのちやから、斯うしてやらぬと其方の身が浮ばんのちや。よつてモウ暫く辛抱せよとの神様のお言葉が、身にヒシ／＼とこたへ、この苦勞も神様の測り知られぬ思召によるものと、やゝともすると頭を擡げやうとする不足や愚痴を抑へて、お詫びとお禮を申し上げて居りますが、私をめぐる苦難が、私自身に於きましても家内と同様今日まで三度まで壽命をつないで頂いて居り、すべて金か、さうでなかつたら命か、金と命の二つ巴であるところから見ましても、私が四代前に××の罪を犯

したればこそ、斯くもあるものであらうと、肯定の頭をさげすには居られません。四代前に犯した罪が子孫二十代つゞくとは、何と恐ろしい事ではありませんか。さうと知らして頂いた私はその恐ろしさに、罪になるやうなことで、メグリになるやうなことは、私がどんな環境の條件の下に置かれましても、絶対拒否！の覺悟を持つやうになりました。

そこで今日の私の實感を申し上げると、判らぬながら足らぬながらも一心に信心さして頂き、改めなければならぬところを改めさして貰うて來たおかげで、私の負つて居るメグリの何割かを消して頂けたと信じさして頂いて居ります。そしてその何割かのメグリが消えたゞけそれだけの徳がそこに生じたと思はして頂いて居ります。メグリが消して頂いたといふことだけでも非常の喜びでありますのに、それだけの徳がそこに生じたといふことは何といふ有難いことでありませう。メグりを債務に譬へましたら、それと對蹠的に徳を債權と申しても宜しからうと存じますが、天地への借金が天地への貯蓄となるとは、何たるおかげでありませう。私にとつては斯んな驚異は御座いませぬ。理窟を云はれる方には、元來

メグリとか徳とか申しても、それは無形のものでありますから、メグリが多いとか、徳が少いとか、メグリを積むとか、徳が蓄へられるか云ひますと、一寸呑み込めない思ひがするかも知れませんが、私の實感に於ては、それがハッキリして居りますので斯く申し上げるのであります。それを云ひ現はさうとするかどうか、云ふ言葉を用ひるより云ひ現はしやうがないからであります。それで私と致しましては、私の脊負つて居るメグリの全部を消して頂く覺悟では居りますが、或は私の二代目の信心の肥料に多少はお残しになるかも知れず、それは私の如何とも致しがたいところであります。

私は既往三十何年間の信心の歷程を振り返つて見て、まつたく吃驚して居ります。たゞ目先のおかげしか追ふことを知らなかつた信心が、終には永遠のおかげの世界へ進み入らして頂き、知らずくの間メグリが消えて、私が算盤に置いて居なかつた徳が生じて来たのであります。御教にも『先の世までも持つて行かれ子孫までも残るものは神徳ちや神徳は信心すれば誰でも受ける事が出来るみてると云ふ事がない』とありますが、まつたく信心は大した事ではありませんか。之

れは獨り私だけに限つたものではありません。信心さして頂く誰もが蒙ることの出来るものであります。皆様もやがて五年か十年後には、必ずこの法悦に歡喜を覺えられることであらうとお察し致します。受けた神徳が先の世まで持つて行かれるだけでなく、子孫に譲ることが出来、子孫に残して行くことが出来ることは、まことに有難く尊いことであります。その歴然として生きた證據は、御廣前様に現はれて居りまして、教祖の御徳がそのまゝに二代様、三代様に傳つて居ります。まさに天下一品であります。宗教の歴史に就いて、その盛衰興亡の跡を顧みるに、名前だけは立派に傳つて居ますが、徳が共に傳つて居るのは、之れを見出すことが出来ません。之れは金光教の獨特なところで、天地の親神様の思召によりて開かれたお道なればこそであります。現御廣前様はたしか十四歳の時からお結界へお座りになつたと思ひます。普通に十四歳と云へば、腕白盛りの頑是ない頃ですが、それがどうです？ 誰がどんな問題をお伺ひ致しましても、スラ／＼ハキ／＼仰せられます。それは教祖そのまゝのお徳が現はれて居るからであります。この徳の繼承といふ事に就いて、私のために或る先生が心配して下さつた事があり

ます。

「君一代はよいが、二代目が案じられる。教の通り果して代まさりのおかげが受けられるだらうか？」

「その御心配は御無用です。心配してくれるのは有難いが、それは杞憂に過ぎない。モウ生きて居る間から渡してある。」

「渡してあるつて何を渡してあるのか？」

「私の信心によつて受けた徳を生きて居る間から渡してある。」

「そんな事が出来るか知らん？」

「私はチャンと渡してあるつもりです。」

「でも財産なら生きて居る間に渡しも出来るが、徳がそんな具合に行けるだらうか。」

「行けなくてどうする！ でなかつたら金光教が嘘になる！」

その時斯んな問答が交換されましたが、私が強くそんな主張を持して譲らなかつたのは、さきに「お取次も亦奉公である」の條でお話したやうに、私が教會を持たして頂いた三年目に、どうしても御本部の講習に参らねばならなかつた時、家内と倅

と書生とで、私の留守中滞りなくおかげが蒙れた體驗によつて、それが疑ふべからざる現前の事實として實證されて居るからであります。たゞこゝに大切な事と云ふのは、二代目を繼ぐ者に、この初代の徳を受け繼ぐ熱意の有ることであり、折角初代が徳を譲り徳を渡しても、二代目が「私は何にも知らん判らん」で徳を受け繼ぐ心がなかつたら何ほ神様から親の徳を譲り受けられて居つても逃げる事になりますから、そこに留意を怠つてはなりません。

ところで、メグリと云ひますと、一概にそれを親先祖の罪障に歸し、我が信心を棚にあげて、親先祖の罪障で片付けやうとする人がないでもありませんが、之れは大きな心得違であつて、無茶も甚しいと云はずには居られません。メグリとは決して親先祖の罪障をのみ指すものではありません。一二の事例をあげて見ますに、學問不勉強で學校を出ても何の役にもたぬとすると、之れもメグリですが、之れは誰のメグリです？ 昨日暴飲暴食して今日病苦の床に横たはることを餘儀なくされたとすると、之れも亦メグリですが、之れは誰のリメグでせうか？ ながらちメグリと云つても、それは親先祖の罪障ばかりとはかぎりません。何か失

敗とつたと云ふので、それを仔細に吟味して二月三月前に溯つて見ますと、そこに今日の失敗の原因がチャンと見出されますのに、それを先祖のメグリと云ふ人があつたらどうでせう？ それは果して先祖のメグリでありませうか。そこに多くの信者の間に取違があるやうですから、それを指摘して置きたいと存じます。自分のなすべきこともなさず、自分自身はその種を蒔いて置きながら、いざその取入れをしなければならぬ時となると、我が面上にかゝる忌はしい唾は、實は知らぬ顔で、失敗とつたも自分が仰向いて吐いたものであるにかゝはらず、その省察もなくそれを親先祖に引つつけ塗りつけると云ふやうなことは、親先祖に對して相済まぬことで、それこそメグリの上にメグリを積むことになるでありませう。私が私自身のメグリに就いてお話し致したのは、斯う云ふこともあると、メグリに就いておぼろげながらも判つて頂きたく、その一斷層面を御参考にまで披瀝したに過ぎないもので、メグリに關する私の一斷想とお聞き取り願へたら結構に存するものであります。

昔からの諺に、「蒔かぬ種は生えぬ」とありますが、この諺を裏返しますと、蒔いた種

それにその粃を蒔き、水をやつて大きくしました。穂が三十九本出て、一本の穂に百粒ぐらゐづつついて居ります。それで勘定すると、ざつと四千粒になります。昔から「一粒萬倍」と云ひならされて居りますが、一粒が四千倍になつた事は、否定することの出来ない事實であります。そこで私はそれから何を看取り感得したことでありませう？ 「之れは油斷のならぬ大事な問題である。若し自分がおかしな種となつたら、とてもやりきれるものではない。どうしてそこに意を用ひずに居られよう。假に一粒を一圓とするか、一粒が四千倍になるのだから一圓ごまかせば四千圓にして支拂はねばならぬことになる。四千圓とは大きいにも大きい。高利貸の金が如何に高利でもまだ足元にも及ばない。之れでは悪い種を蒔いて居ては到底助かりつこがない！」と、感歎之れ久しうしたことであります。こゝにお互がお互の一舉一動に大いに戒慎を要すべき示唆と暗示とが秘められて居ることを見のがしてはなりません。一圓が四千圓と云うて、何も私は一圓が四千圓になつて支拂はれると云ふ事を不動の鐵則であるかのやうに主張しようとするものではありません。金で云うて見ればそんな風に譬へられると云ふのであり

ます。私はそれがお互の一舉一動に關して、どんなにまで時間的伸展性と空間的擴大性を持つものであるかを知るに役立てばそれで足りるのであります。こゝに假に酒に女に爛れきつた放蕩無頼の人がありとします。その人の子孫が殖え行くにしたがつて放蕩無頼癡癡白痴が何んなに芋蔓式に増殖し、國家社會に如何ばかりの害毒を傳播することでありませう？ 之れは科學も明白に證明するところであります。

尙メグリに就てお話をするならば、他に實例はないでもありませんが、こゝらで端折り、こゝには是非申し上げたいことは、如何にお互がメグリ深くあらうとも、それは決して憂ふるに足らぬことであります。何故ならば、山高ければ谷深しで、どんなにメグリが深くありましても、それを助けなければやまないといふ神様の悲願の方がヨリ深いからでありまして、それは御教にも『子供の中に屑の子があればそれが可愛いのが親の心ちや無信心者ほど神は可愛い信心しておかげを受けて呉れよ』とあるによつても、その悲願のほどがハッキリ讀み取らして頂くことが出来るからであります。そもく金光様がこの金光教といふお道をお立てなされお

開きなされたことが、この天地の神様の悲願そのものが現れた事であります。私はこの條の最初に御理解第三節を引き、『天地の間に氏子居つておかげを知らず神佛の宮寺氏子の家宅皆神の地所其理知らず方角日柄ばかり見て無禮致し前々の巡り合せて難を受けて居る』と申しましたが、この御理解には更にどんな神様のお言葉がつゞけられて居ることでありませう？ 『今般生神金光大神を差向け』と仰せられお互に與へられたお約束はと申すと、『願ふ氏子におかげを授け理解申して聞かせ末々迄繁昌致す事氏子ありての神神ありての氏子上下立つやうに致す』と云ふのがそれでありませう。然りと致しましたら、天地の親神様が生神金光大神を此世にお差向けあそばさされましたのは、一にも二にも三にも四にも、メグリで難儀をして居るお互におかげを授けてお助け下さるためであります。さればお互の信前の天地はたゞに暗いメグリの一路あるばかりでありまして、信後の天地はお互の前に展け来るものは明るいおかげの一路でありまして、どんなにお互がメグリの重いものでありまして、神様のおかげの機重機には救ひ上げられないではやまないのであります。たゞお互はあらゆる艱苦に堪へ、『改まりによつて親先祖

より子々孫々に至るまでおかげを蒙る『信心の玉成を期すべきであります。そこに如何にメグリが深くありませうとも、『先の世までも持つて行かれ子孫まで残る』神徳を受けさして頂くことも出来るのであります。

私の友人に明治三十年の春頃から信心さして頂いて居た方があります。名前は差控へますが、その方の商賣は運送店で船舶をも取扱つて居りました。信心さして頂いてから始め半期ばかりは都合よくおかげを蒙つて居りましたが、半期ほどするとピシヤツとおかげがとまつてしまつて、随分一所懸命にお願いもして居りますが、一向におかげが蒙れません。段々と手元が逼迫して来て苦しくなるにつれて、お参りにも精根が入つて來ました。朝四時頃に起きて御飯を食べると教會へお参り致します。その頃は初代白神先生の奥城が岩崎といふところにありましたので、其處へお参りして店へ参ります。店は川口にありました。店には俵がありますので、俵を乗り廻して得意を歴訪致します。晩に店から歸ると逸早く又教會へお参りする。斯んな調子で一所懸命になればなるほど都合が悪いので、すからたまりません。そこへ持つて來て、教會へお参りしても先生の御機嫌がよ

くないので、どうもそれに氣がひかれ、先生の御祈念の時間を考へて、コソ／＼と忍び足でお参りさして頂くやうな始末でありました。それで三十四年の暮に到頭行き詰つてしまひました。ところでその方の親戚には相當の暮しをして居る人がありましたので、それを見兼ねたのでありませう。「あんな神様を信心するから都合が悪くなり貧乏するのだ。此際信心するのを廢めるなら兄弟が寄つて世話をしよう」と云ふやうなことでありました。親類や兄弟が心配して云うてくれる事ですから、云うことを聞いて世話をして貰つた方がどんなに樂だか判りませんが、神様の信心を廢めて厄介になるやうなことは斷じて出來ない。自分の至らぬために斯んな事になつたにも拘らず、それを神様に信心するからと云はれては何とも神様に申譯がない。おかげを蒙つて居るならよいが、おかげを蒙つて居らないのであるから、おかげを蒙るまではどんな事があつても信心は廢められない。それでなくては神様に相濟まぬ。斯んな思ひで親類の申出を斷つてしまひました。この思ひは大變宜い思ひだと存じます。ところが三十四年の暮にすでにチヤブンと行く處を、不意に五千圓ばかりの金が出来て、その急場を凌ぐことが出來

ました。それと云ふのは、すでに家を二番抵當にまで入れてトコギリ金を借りて居ましたところへ、ピョツコリ口入がやつて來まして、「あいた金があるから使はないか」と云ふ話です。使ふには抵當が要るだらう？」「抵當は要りますが、家を抵當に入れさへすれば」「それならあかん。夙に入つて居るので」「何ぼで？」「一萬二千圓、一割二分の利息で」「それなら入れ替へたらよろしい。こちらは一萬八千圓、九朱の利息で借り替へられるから」と云ふやうな次第で、一萬八千圓借りて、一萬二千圓を辨済して差引五千圓ほどの融通が出來ました。それで明治三十五年の初春を迎へましたが、その年は博覽會ですつかりなくしてしまひ、又三十六年に差押へを受けなければならぬやうな窮狀に達しました。八百圓ほどの金の調達が出來れば、その瀬戸が乗り越えられますので、愈々競賣に附されるやうな事になつては、お道汚しともなつて申譯がないと一心にお願ひして居りますと、その時も圖らずも口入が入つて來まして、「八百圓ほどの金があいて居るから使はないか。利息は一割二分だ」と云うてくれました。溺れる者は藁をもつかむの譬です。喉から手が出るほど欲しい時ですから、利息の高い低いは云ふて居れません。早速借

りることにして登記することになりましたが、相憎その日は半どん土曜日です。何でも早く行かぬと登記所が退けるので、泡を食ふ思ひで登記所へ駆けつけました。登記所は丁度退け時で役人がオールドといふ巻煙草——之れはその頃にあつた兩切煙草の名ですが、喫つて居るところで、之れをあつちで喫むかこゝで喫むかの相違だからやつてあげやうと快く登記の手續をすましてくれました。ところが越えて三十七年の正月であります。私が教會所へ參拜さして頂きましたら、先生から某さんも今度の正月は餅も搗けなかつたさうだ」とのお話です。私はさうと承つて非常にお氣の毒に思ひました。かりそめにも店員の五人七人と使うて居る一家の主人として正月を迎へるのに餅がつけないとは、何といふ惨めなことであらう。と思ひますと、私は矢も楯もたまらなくなりました。「何うも神様は判らず屋である。いつてもいかいでもあれだけ一所懸命に骨折つて居る。周囲の見る眼も痛ましいくらゐ信心して居る。あんな方におかげをやつて下さらないやうなことから、今後信心する人がなくなるばかりか、現在信心して居る者でも、あのかくらの一所懸命に信心して居て、あんな事になるやうなら信心も考へ

ものだ。むしろやめた方がましではないかと去ふやうな事になつて廢める人
が出ないとはかぎらない。さうなれば勢ひ之れから何でも信心さして頂いてと
思ふ人でも二の足を踏むことになる。すると之れは輕々しく放つて置けない大
問題である。一體神様の思召はどうなのであらうか。どうも神様も聞えぬ恨み
が大きい。幸ひ某さんは朝に夕に白神様のお墓へお参りして居るから、直接神様
に申し上げるより、一應白神様に申し上げて見ようと思ひ、早速白神様のお墓へ私
一流の理窟を並べたてに参つたものであります。

「白神様。あなたは大阪へお道を廣めに來られたのではありますまいか。それ
とも自分が亡くなつたかぎり、後は野となれ山となれと云ふ思召なのですか。ど
うもあなたのお考が判りませんのでお尋ねに上りました。あなたに於かせられ
ても、お道を廣めようといふお考へなら、あゝいふ行き方では、道はすばまつても廣
がらないと存ぜられます。あなたの思召がさつぱり判りません。いつてもいか
いでもあのくらい熱心な者には、一應おかげを、やつて下さる事が大事です。雨の
日も風の日も六ヶ年間熱心に信心して居る者を放つたらかして置いて、少しも願

みてやらうとなさらぬやうでは、お道は廣まりさうな道理がありません。あなた
がお道を廣めに來られたのであつたら、何で之れを放つて置きなさるのです。私
は甚だその意を得ませぬ。あなたは斯んな方におかげを授けようとなさらずに、
どんな人におかげを授けようとなさるのです？ 斯んな事を捨てて願ひようと
なさらぬくらゐなら、お道を廣めに來られなかつた方がマシと存ぜられます。」

私は思ひ詰めたら思ひ詰めたまゝを吐き出さずには居られませぬ。斯んな事
を申し上げたら不敬になりはしなかなんて頓着は更になしであります。

「それとも本人の信心に就ていかぬ點があるのです。何でそれを先生を通じ
て教へて下さらないのです！ 頼むは其方の勝手といふやうなあなたの態度は、
どうにも承服出来ません。いけないならどの點がいけないのか？ どう云ふ都
合に信心さして頂けばいゝのか？ 是非御指教願ひます！」

と、私は白神様相手の強談判であります。すると、

「今、信心に就て彼是云ふ場合でない。」

とのお答へが得られたやうに感じましたので、私はこの時こそとたゞみかけて

ゆきました。

「それでは何故斯んな事になるのですか？」

「モウ之れより以上おかげのやりやうがないのだ。」

「正月に餅も搗げないやうなおかげを頂かして下さいとはお頼みしなかつたと思ひますが、之れは何かのお間違では御座いませんか。之れはとても辛抱出来ません。店員の五人七人と使うて居て、正月に餅も搗げぬといふ事は、一通りの事ではありません。まさか正月に餅も搗げんやうにして下さいとお頼みする酔狂者はありませんまい。そんなおかげなら要りません。それでは氏子が助かりません。」

「之れだけ云うたら、其方には判つて居るぢやらうに。」

「判りません。それが判つて居るやうなら、あなたの前へ斯んな事を申し上げには参りません。」

「某の家には一ばい二ばい三ばいといふ罪があるのぢや。判つて居るだらう。」

「一ばい二ばい三ばいとはどんな事で御座います？」

「親祖父、曾祖父だ。」

「一ばいだけは聞いて居りますが……」

「祖父はヨリ以上の罪を犯し、曾祖父もそれぢやによつてに、さういふメグリがあり、之れ以上の繰合せは出来ないのだ。」

「と仰せられたゞけでは困ります。結局どうして頂けるので御座います？ あ

の家は潰すことは出来ません。」

「潰しはせぬ。モウ暫く辛抱せよ。」

「暫くは御免蒙ります。あなたの暫くは、半期でも暫くなら一年でも暫くです。

それに辛抱せよと仰せられますが、辛抱出来るくらゐなら斯んな事を申し上げますに出ては来ません。一體何時までの暫くで御座いますか？」

「では二月の中頃まで。」

「二月辛抱させますから、どうぞおかげを授けて頂きますやう……」

「数々の御無禮な事を申し上げたことをお詫び申し、有難う御座います」と御禮を申し述べて、立ち上りますと、その足で友人の家を訪れました。友人はまさに思案投首の態であります。

「どうした？」

「とてもやつて行けないので、商賣をやめて堺の某家へ奉公しようと思つて居る。」

「一寸待つた。大體の様子を先生に承つたが、どうも判りかねるので、お墓へ行つて白神様と談判して來た。結局二月の中頃まで辛抱せよ」との事であつた。

二月の中頃まで土にかちりついて辛抱すればきつとおかげになるから……」

「さうか。それは有難う。私の家がメグリの深いことは承知して居る。」

「一ばい二ばい三ばいと云ふのだから。」

「まつたく相濟まん。」

「然しヨウ辛抱が出来た。之れもおかげで辛抱が出来たのだ。」

「その通り、おかげだ。」

斯かる次第で二月中頃まで辛抱して居りましたが、果せるかなスーツとおかげになり、六年越しの難關打開のおかげを蒙りました。その後八月頃であつたと思ひますが、久し振でその友人に教會に出合ひましたので、

「暫く逢はなんだが何處へ行つて居たのだ？」

と訊ねますと

「一寸、有馬へ。」

との返事でありましたから、

「それはお楽しみだが、ついこの間まで苦しみ通して居て、少々樂になつたからと云うて有馬遊山とはどうしたことだ。喉元過ぐれば熱さを忘れるといふが、五年も六年も苦しんだのを忘れてしまつたのか。神様の方ではその間並々ならぬ筋道をつけて下さつた御苦勞のほどが判らないのか。そんな考を持つて居ては助からないぞ。」

と注意さして頂いたやうなことです。兎に角六ヶ年を打通して苦しみに苦しんでも、信心の道を迷はず失はず踏み通して、前途を阻む苦難の關頭を突破したその信心ぶりは、お互の信心の手本となるものとして敬意を表せずには居られませぬ。

この間も、

「先生、貧乏で困つて居ます。」

と訴へた方がありましたから、その方に向つて、

「さうですか。それは金持になる前程として結構ではありませんか。誰も貧乏せずには金持にはなれません。金が持てないのは、まだ貧乏が足りないのです。昔から貧乏せずに金持になつたためしがありません。貧乏しなかつたら金持になれないのです。貧乏が非常な手習になります。一遍貧乏しない事には金の有難さ尊さが本當に判つて腹の底に沁み込みません。此頃、學校出て就職口がないと困つて居るやうだが、困つたらいゝのです。さもなくば會社へ入つても、よい加減な事で終つてしまひます。今困つておきますと、今度就職した時、一所懸命に仕事を致します。一遍苦しんだらよく判ります。私も長い間苦しみました。それでやつと總てが判らさして頂けるやうになりました。あなたも精々貧乏してよく判らして貰ひなさい。」

と云うて置いたことですが、お互には何時どんな事が世渡りの上に起るかも知れないのですから、その用心がなければなりません。今日も、

「先生、斯う人氣が悪うてはやりきれません。」

と云ひますので、

「いや、まだもつと悪くなるかも知れん。」

と申しましたら、

「エツ?!」

と大きな驚愕の眼を見開いた方がありました。斯んな方は、よい時ばかり、よい事ばかりがつゞくもののやうに思つて居られるらしくあります。日和があつたら必ず雨があります。日本では春があつたら夏があり、その次が秋で、秋の次には冬が訪れます。それは世の常として當然すぎるほど當然な事であります。この世の世渡りには大か小かの相違はあれ、苦難はどうしても逃れられません。それは一日のうちにも晝があれば夜があるやうなものであります。そこでお互は、この時この事あるを覺悟しなければなりませんので、『まめなとも信心の油断をすな』『氏子十里の坂を九里半登つても安心してはならぬぞ十里を登り切つて向うへ降りたらそれで安心ちや氣を緩めると直に後へもどるぞ』と御教へ下されてあるのであります。そこでお互が難關逆境に直面した場合ですが、その時には「つらい」と

泣顔になつてはなりません。「困つた」とへこたれてはなりません。「信心するものは驚いてはならぬこれから後どのやうな大きな事が出来て来ても少しも驚く事はならぬぞ」とあはてふためかす、ガツチリ態勢をととのへてすべてをおかげとして受け「これ程信心するのにどうしてかういふ事が出来るであらうかと思へば信心はもう止つて居るこれは未だ信心が足らぬのちやと思ひ一心に信心して行けばそこからおかげがうけられる」と神様を離さぬやう一心にお縋り申し、病人や代々難儀の續く人が神のおかげを受けるのは井戸替をするに八九分替へて退屈して止めれば掃除は出来ぬそれで矢張り水は濁つて居るやうなもので信心も途中で止めれば病氣災難の根は切れぬ井戸は清水になる迄病氣災難は根の切れる迄一心に壯健で繁昌するやう元氣な心で信心せよ」と信心の爆薬筒を提げて難關突破に勢ひ立つ肉弾勇士として「事があつたらおかげ頂く時が来たと思へ」の御教通りに、如何なる苦難も克服して、それをおかげにして頂き、希望の彼岸への到達を期すべきであります。その段になりますと、人間よりも草木の方が餘程賢く立ち廻つて働いて居るやうは思はれます。

前方靄の裏通に櫻の木がありました。私はそれを見まして、木と云ふものはうまく働くなあと思つたことあります。春になると芽を吹いて、段々と枝を伸ばして行きますが、伸ばす時は一所懸命幹も伸ばせば枝も伸ばします。梅雨は植物にとつては小判の降るやうな御時節で、木々といふ木々は黄金の雨を貰へるインフレ景氣であります。梅雨が過ぎると土用になります。日はカン／＼と無遠慮に照りつけますので、葉は日中キリツと巻いて居ります。まさに命がけで土用を越すといつた恰好です。すると訪れるのは秋であります。ヤレ／＼堪へ難い暑さの峠を越へたと思ふと、冷たく吹きつものものは秋風で、葉はむごたらしくも吹き落されてしまひます。ところで受難はそれで終止符が打たれるかと思ふと、中々どうしてそれですみません。今度は霜と雪とに襲はれます。葉が散つてしまつたのは、お互で云ひましたら、財産がなくなつたやうなものであります。その上を霜と雪とでおさへつけられるのであります。斯んな時木はどんな態勢をとつて居るかと思つと、幹や枝には大して力を入れないで、まゝと任して居り、根に力を入れて居ります。上に伸びない代りに根にウンと力を入れて居ります。之れ

を修行と云うたら當つて居りませう。その姿勢が餘りみすばらしいので、枯れて居るのではあるまいかとさへ思はれますが、枝を折つて見ますと枯れては居りません。矢張血が通つて居ります。葉は散つてしまつて居りましても、先々にツボくがついて居ります。希望とでも云ひますか、枯れて居るやうに見へますが、このツボくは放しません。お互は一寸風向が悪いと、何だ彼だとゴタクを並べたてた揚句の果は、悲觀したり自暴自棄になつたりしますが、木はそんな事はありません。冷たい風に葉を吹き落され、霜や雪に虐げられて、尾羽打ち枯らしたやうになつて居ましても、望みは失はずにシツカリと握つて居ります。ですから一度春風が梢を訪れますと、その望みは次第に大きくなり、芽は吹き枝は伸び幹も伸びないではやみません。それが人間であつたらどうでありませう？人間があの木のやうに尾羽打ち枯らしたとなつたら、その内面は外見以上であります。その精神的打撃は死以上と云つた惨さでありまして、人間ともあらうものがそんなざまでどうする！と、草木から嘲笑の唾を吐きかけられても文句なしと云つた有様であります。お互はこの木を見て、我が思ひの至らぬところの多いことを感知しな

ければなりません。我が道は『目出度目出度の若松さまよ枝も榮える葉も繁ると云ふではないか金光大神は子孫繁昌家繁昌の道を教へるのちや』と仰せ出されたお道であります。『神も助かり氏子も立行く』のであるから『信心しておかげを受けてくれよ』と、神様の方から恐れ多いことには手をついてお頼みになつて居られるのであります。お互はこの神様に信心さして頂いて居るのであります。この神様に一心にお頼り申して何で助からないことがありませう。東京へ行かうと思つたら、大阪驛へいらつしやい。東京行の汽車が歩廊に横付けになつて居ります。さつとお互を東京まで運んでくれます。然し東京へ行かうと思つたら、その東京行の汽車の箱の中へ乗り込まねばなりません。如何に東京行の汽車だからと云つて、あれが東京行の汽車ぢや〜と云つて歩廊に立ちん坊して眺めて居たのではあきません。何時でも來れ！極樂行の汽車は煙を吐いて用意されて居ります。お互はたゞそれに乗り込むことです。お互はお互自身がどんなに頼りなくどんなにメグリ深く俺が！俺が！では到底世渡りは安全に出来ないものであることは丁度杖を持たない盲人の走るが如く危険千萬なものであることを知つた

ら斯う云つたお互のために御苦勞下さる神様にお頼り申しお頼り申しお願ひ申すべきでありまして、そこにこそ生活の不安は除かれ生活の苦難は影を没するに至るでありませう。私が神様から頂いた御教に『神が心勞して十分なおかげを授けても、氏子の方ではどうやら斯うやら歪みなりのおかげと思ふて居るが故に、愚痴と不足が出るんちや、愚痴と不足と勝手考へと取越苦勞はおかげの斷りを云うてゐるやうなものぢや』とあります。こゝをヨウお考へ合せを願ひます。神様は萬事に御心勞下され、末爲めのよいやうにと御都合下さつて居るのであります。それをお互が愚痴や不足や勝手考へや取越苦勞で汚辱するとは何たる相濟まぬ事でありませう。お互は神様を信じさして頂いた以上は、あくまでも信じ切らせて頂いて、『真心の道を迷はず失はず末の末のまで教へ傳へ』『改まりによつて親先祖より子々孫々に至るまで、おかげを蒙ること、餘念なくありたいものであります。以上ながくと、我が信心の體驗と歷程を語らして頂いたのも、私がおかげを蒙ることが出来ましたので、皆様にも同様におかげを蒙つて頂きたく、私の蒙つた盡きぬおかげを話にして聞いて頂いたのであります。多少でも皆様の御信心の

上にお役に立つところがありましたら、私の本懐之れに過ぎたものはありません。

我が信心のあゆみ

(終)

昭和十三年五月二十五日印
昭和十三年五月三十日發

刷行

定價 金貳圓參拾錢

編輯者

大阪市西區江戶堀北通二丁目十五ノ一
金光教玉水教會所
右代表者 湯川 茂

不許
複製

發行兼
印刷者

東京市神田區錦町二丁目七番地
佃 要三郎

發行所

東京市神田區錦町二丁目七番
振替東京七九五七七番
大阪市東區博勞町五丁目
振替大阪九八二〇番

英進社



終

